

2018
10月

ゆうひるば

遊通信
第168号



↑ 2030年の北海道のあるべき姿を考えるCSO(市民社会組織)ミーティングより (2018年10月6日、札幌エルプラザにて)

特集 「1968年」が問いかけるもの

荒川章二さん(歴博・前教授)講演	・・・2
1968年からの問いかけ	・・・5
小田まことさんとベ平連をめぐって	・・・6
「革命的暴力」に代わるもの	・・・8
大学における学生自治の行方	・・・10
ベ平連から今日までの市民運動を振り返る	・・・12

寄稿 北海道命名150年と開道100年	・・・14
連載 フィールドワークな日々(第75回)	・・・15
連載 東さんのポロポロ日記(第99回)	・・・16
企画報告 グループ別ワークショップ開催	・・・17
連載 きままに俳句(第16回)	・・・18
事務局便り ほか	・・・19

特集 「1968年」が問いかけるもの

ベトナム戦争の激化などを背景に、新しい形の反戦運動や大学闘争が世界で同時的に広がっていった「1968年」。日本においても、全共闘運動やベ平連運動など、既存の社会のあり方を根源的に問い直す運動がうねりのように広がりました。それから50年。日本では当時発せられた様々な「問い」の持つ意味はあまり顧みられずにいるのではないのでしょうか？ 私たちは当時の問いかけや行動から何を受けとめ、そして何を乗り越えなければならないのか一年間を通して企画した講座に合わせて、特集を組みました。

「1968年」自立した市民が初めて登場 憲法を掘り下げ、民主主義を鍛え直す

荒川章二さん（歴博・前教授）講演

国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）の前教授 荒川章二さんは日本における「1968年」を「個人が自ら問いを立て、行動する市民が登場した時代」と規定し、「日本国憲法を掘り下げ、戦後民主主義を鍛え直したところに意義がある」と述べた。通年講座「1968年から50年―その問いかけを今に」の折り返しプレ企画として10月19日、荒川さんを招いた講演を札幌市民ホールで開いた。

幅広い年代で参加、すそ野広く

荒川さんは昨年秋、同館で開かれた特別展『1968年』・無数の問いの噴出の時代』の発案者。2時間を超える講演で最初に指摘したのは、「1968年」をめぐる世界と日本の共通するところと異なる点。

「反乱の時代」といわれたが、欧米各国では主に学生を中心にした若者であったのに対し、日本では若者に加え30〜50歳代の参加も多く、特に女性が運動に登場したことが特徴という。さらに「1968年」というと、フ

ランスでは「5月革命」、アメリカではキング牧師暗殺のような事柄で輪郭は鋭くかたどられるが、「日本ではどういう年であったか意外と共通認識はない」という。

しかし、「1968年」前後はベトナム反戦という世界的共時性を持ち、欧米はじめアジア、アフリカの一部を含め世界各地で問題が一挙に噴出しており、「1945年」（第2次大戦終了）「1989年」（冷戦体制の終結）に匹敵するほど、人々に記憶される年号になっているという。

その「1968年」前後の日本の運動は自己否定、大学解体、そして内ゲバなどの暴力によって「一般的には否定的なイメージ」であり、連合赤軍によるあさま山荘事件に対する「お定まりの評価」で終わっている。しかし、「あれだけ多くの人々を駆り立てた運動が、それだけの評価で終わらせていいのだろうか」「豊かな問いかけがあったのではないか。それを含めて見直すべきではないか」と実施した企画展の狙いを話す。

「対立と排除」の運動から脱却を

見直しの切り口は、戦前にさかのぼる日本の政党、労働組合、大衆運動との比較。荒川さんは、これらの運動では統一行動に向けた組織間の調整と動員が重視され、その間に常に「対立と排除」の構造があるという。そして「だれもがデモに入れるような運動にはなっていない」「人々が主体的に取り組むには限界がある」「組織的に地域の運動を支援したとしても費用面だけで、『投票』を見返りとして求める」などと指摘する。そして最大の特色は「男性性」が強い組織運動であることだ。

そして荒川さんは、この運動は1950年代に全盛期を迎え、1970年代前半から沈滞のはじまる70年代半ばまで、「1968年」を特色づける新しいタイプの運動とは対立しながらも、共存したという。

その新しいタイプの運動の背景にあるのがベトナム戦争で、当時、日本の（アメリカへの）協力ぶりは、米軍負傷兵が運び込まれた王子の米軍野戦病院、立川へ国鉄で運ばれるジェット燃料などで「可視化」された、と指摘する。その一方で、日本はかつての軍需工場跡地を活用してコンビナートを形成し、軍事技術転用による工業発展で高度成長を遂げつつあった。加えて「皮肉なことに、日米軍事同盟のもとにある『非軍事』経済」による

高度成長の矛盾として公害など身近な問題が一挙に噴出した。

ところが、こうした急激な変化に対し、政治・経済の構造は対応できず、例えば、労働組合は雇用を守り賃上げを求める立場から「企業を守る」側に回り、公害問題では住民と対立するようにならなくなった。従来の組織と住民が対抗する関係が「顕在化」した。

目の前にある公害、基地問題に対し、個人、小集団、地域の住民有志が「問いを自ら立て、行動する中で」政治思想の違いに拘泥しなくなった。そして、従来の政党などの指示命令、所属する労働組合・企業などの規範とは距離を置くようになった、という。

「自ら考え、問い、行動する」一人の人間へ

「個人として、あるいは人間として考えるようになつて特に重要なのは、平和、民主主義の政治思想を乗り越えるように、一人の人間としての差別、人権に気づいたことだ。」「自分の生きる、こどもを育てる環境のありようを自分自身で主体的に考える住民が生まれた。これを市民といつてよい。」「生きる生き抜くために、新しい問い―抗議として表されるかもしれない―を自ら発し、行動する人が大量に生まれた、この総体が『1968年』の日本の運動の最大の特徴だろう。これは全共闘、新左翼、ベ平連とかの名称に関

わらない現象という。

各運動それぞれに特色

こうした概括のうえで、企画展示に沿ってベ平連、神戸での市民運動、三里塚闘争、熊本水俣病闘争、横浜新貨物線反対運動を取り上げた第1部、東大、日大を中心にした全共闘運動を振り返った第2部について、荒川さんは項目別に報告した。ここでは詳細には記述できないので、筆者（山本）の印象に残ったポイントを羅列する。（別掲、図録目次を参照）

【ベ平連】米軍への基地提供から生まれた加害責任が、日本の戦争責任に発展したこと。ベトナム戦争をめぐるアメリカの良識派と提携しようとした発想は初めてだった。

【神戸の運動】自分たちの住む神戸の港が米軍に管理され、ベトナムと直結している気付きから運動が始まった。在韓被爆者の存在を明らかにし、部落差別問題、在日朝鮮人、在日華僑にも目配りしたこと。

【三里塚闘争】「日本農民の誇り」として地域挙げて闘われ、男性長老をトップとする従来のピラミッド型の地域共同体が、女性の登場と活躍で大きく変容した。女性の活躍は、その後のフェミニズムの基盤につながるものだった。「百姓だって人間だ」という発想が、その後、有機栽培など「文化的」な展開に結

びついた。

【熊本水俣闘争】被害当事者による告発が、企業を裁く道具として裁判を使うように公害運動で定着させた。「恥宣言」（合化労連新日窒労組）が出るまで、「戦後革新」は地域住民と対抗してきた。「国家権力と闘う」と年配者をも決意させたこと。

【横浜新貨物闘争】公共性を掲げた公共事業に対し、生活環境を守る自己決定権で対抗した。その運動の中心はこどもがいる30〜50歳代の女性だったこと。民主主義の主人公は市民であることの確認を通じて、革新自治体も批判した。

【東大・日大全共闘】いずれにも前史があり、しかも「ベトナム」がキーワードだった。東大ベトナム反戦会議は米軍資金提供による学問研究を学会と連携して学問のあり方を訴え、日大では数学科事件で解雇された教師がベトナム問題に関する数学者懇談会を足させ、学生の運動を下支えした。両大学いざいざでも、ノンポリ学生が討論、自主講座など運動の進展で、ノンセクトラディカルへと変わった。

問いの深さと重さが運動を持続させる

まともに当たって、荒川さんが「1968

年」の日本の運動で指摘したのは、①当時の問いの深さ、重さによって意義を持ち続ける問題群が依然あること、②社会的問題意識・関心を持ち続け、必要に応じ行動に移す人を多数生み出したこと―の2点だ。それらは戦後民主主義をいま一度見直す契機となる。旧来型の「戦後革新」の運動が沈滞する一方なのに対し、「1968年」前後にスタートした新しいタイプの運動は弱体化しつつあるとはいえ、時に国会を取り巻くようなエネルギーを底力に持続しているとみている。

山本伸夫（やまもと のぶお）

北海道新聞元記者

企画展示「1968年」無数の問いの噴出の時代 目録目次より

- 第1部 「平和と民主主義」・経済成長への問い
 - 第1章 平和運動の展開：ベトナム反戦とベ平連運動
 - 第1節 ベトナム反戦・反基地運動の広がり
 - 第2節 ベ平連の発足
 - 第3節 多様な抗議スタイル
 - 第4節 国境を越える運動
 - 第5節 様ざまな世代、様ざまな地域、様ざまな人びと
 - 第2章 地方都市から戦後社会を問う：神戸の街から
 - 第1節 「神戸港は南シナ海に、太平洋西岸に通じる」
 - 第2節 解放空間サンチカ
 - 第3節 戦後民主主義を問い直す
 - 第3章 戦後民主主義と戦後農政への問い：三里塚闘争
 - 第1節 三里塚開拓と空港建設
 - 第2節 陳情・請願運動から実力阻止へ
 - 第3節 日本農民の名において
 - 第4節 公共事業と農政への問い
 - 第4章 経済成長と豊かさへの問い：熊本水俣病闘争
 - 第1節 水俣とチツソ
 - 第2節 市民会議の結成、訴訟へ
 - 第3節 告発する会の活動と自主交渉闘争
 - 第5章 住民運動の噴出とその問い：横浜新貨物線反対運動
 - 第1節 横浜新貨物線反対運動の開始と展開
 - 第2節 「公共性」を撃つ
- 第2部 大学という「場」からの問い―全共闘運動の展開
 - 第1章 1960年代の大学
 - 第1節 1960年代の大学社会・学生生活
 - 第2節 社会のなかの学生
 - 第2章 全共闘運動の形成と展開
 - 第1節 1967年から1968年へ
 - 第2節 1968年5月〜7月 日大・東大全共闘の成立
 - 第3節 1968年秋 全学ストライキと大衆団交
 - 第3章 大学闘争の全国展開
 - 第1節 東大・日大闘争の衝撃と大学闘争の全国展開
 - 第2節 造反教員
 - 第3節 大学改革への始動、あるいは挫折
 - 第4章 闘争の沈静化と遺産
 - 第1節 大学管理法と封鎖の解除
 - 第2節 闘争の継続と遺産

特集

1968年からの問いかけ

工藤 慶一

（1）時代

私は1948（昭和23）年旭川市春光町の旧日本軍の官舎で生まれました。樺太から引揚げてきた数多くの人達が集住した地域で、戦後の貧しさを抱えていました。中学卒業間近に、あだ名が「デンスケ」という友が、亡き兄の使っていた高校の数学参考書を私に渡しながら「これを使って世の中を良くしてくれ」と言ったのです。進学がかなわぬ彼の言葉は、ずっと胸の中にありました。辛い受験勉強をしていた浪人中の67年10月8日、佐藤首相のベトナム訪問に抗し、羽田で京大生山崎君が亡くなりました。何もできない自分に涙が流れ、ベトナム戦争が他人事ではなくなってきました。

（2）反戦

こうして68年大学入学後に「札幌ベ平連」に入り、更に「北大ベ平連」に所属し活動しました。他方、教養部の各クラスには「クラス反戦」が続々と誕生し、東大や日大の大学闘争の進化に伴い、連合体としての「教養クラス反戦連合」ができ、大学存在の意味を問

う「北大全学共闘会議」に発展しました。日大闘争の折に、22億円もの使途不明金を出した日大の古田会頭・佐藤首相・暴力団組長が酒を酌み交わす写真は世の仕組みをはっきりさせました。また人のつくり出した制限からの自由を得たバリケードでの解放感、今も忘れることができせん。69年11月8日北大本部屋上で逮捕され、大学中退後の72年12月の高裁判決で実刑が確定しました。翌年1月に「ベトナム和平パリ協定」が調印され、「俺達の言った通りになっただろう」という喜びで房の中を歩き回りました。その後、運動は「全共闘を解体する！各自、自己運動を開始せよ」という言葉を残して終わりました。いつの間にか「我人（われひと）ともにある道を探り、退かない」ことを信念とするようになっていました。

（3）夜間中学

私の道は、札幌遠友塾読書会との出会いから始まりました。88年10月から花崎さんの「生きる場の哲学」を読み、メンバーと話す中で、戦争や病気などで学校に行けなかった

人たちの学びの場を創ろうということになりました。こうして「学ぶことが生きることの証と喜びになる」という言葉をスローガンに、「出来ることから始める」ともに生き、ともに学ぶ」をわが指針として、90年4月に「札幌遠友塾自主夜間中学」を開講し、現在に至っています。1947（昭和22）年に始まった夜間中学は、1954（昭和29）年の全国研究大会で法整備に関する陳情書を採択。62年たった2016（平成28）年12月に念願の「教育機会確保法」が成立しました。日本国憲法第26条にある「ひとしく教育を受ける権利」を保障するための「法律の定めるところにより」の「法律」ができたのです。この法律を現実のものとするのが今後の課題になります。が、まだまだ長い道のりです。北海道は、満州引揚・本州爆撃被害移住・樺太引揚などによる戦後開拓の受け皿となり、十分に学校に通うことができなかつた方が実に多く、また若い人も新たな時代の問題（格差や無戸籍など）を抱えています。今も札幌遠友塾自主夜間中学には74名の方が学んでいます。ふつとつぶやく時があります。「デンスケ、これでいいの？」

工藤慶一（くどうけいち）
北海道に夜間中学をつくる会共同代表

特集

小田まことさんとベ平連をめぐって

山口 たか

あれから「50年」、つい何年か前のことのように、記憶が蘇ってくる時がある。私がはじめてデモに参加したのは1967年10月7日。今も鮮明に、覚えている、あの日の場所、あの空。東京赤坂の清水谷公園。そこは、ベ平連によるベトナム戦争反対の集会の会場だった。「ベトナムに平和を！市民連合」（略称・ベ平連）は、1965年にアメリカによる北ベトナム爆撃に対して小田実さんや鶴見俊輔さんらが呼びかけて立ち上げた運動団体だ。10月7日は、翌8日に、当時の佐藤栄作首相が、ベトナム訪問することへの抗議のデモだった。アメリカはベトナムから出ていけ！と声を挙げながら私たちはアメリカ大使館前まで歩いた。

安保条約により、日本はベトナム戦争に協力していた。傷ついた米軍兵士を治療する野戦病院が首都の真ん中にあった。沖縄からベトナムにB52が飛び立っていた。小田さんは、日本の反戦運動に加害者の視点を持ち込んだ。黙っていることはそれを認めること、戦争に加担すること、と。

「私たちは普通の市民です。普通の市民とは、会社員がいて、小学校の先生がいて、新聞記者がいて、花やさんがいて、小説を書く男がいて、英語を勉強する青年がいて、つまりこのチラシを読んでいる あなたがいて、その私たちが言いたいことは ただ ひとつ ベトナムに平和を！」

ベ平連最初のデモのチラシにある、「普通の市民。それまで「市民」は、札幌市民や大阪市民、つまり、その自治体の「住民」を表していた。ベ平連は、その市民に新たな意味を与えた。即ち市民とは、自らの意志と原理にもとづき行動する民主主義を担う主体である。

政党にも労働組合にも属さない個人としてデモに参加できる場。一人でもやる、一人でもやめる。ベ平連の呼びかけはさざ波のように各地に広がっていく。

60年代半ばからの10年あまりは、世界的にも学生反乱・反戦運動の季節だった。ベ平連は、日本で初めてニューヨークタイムスやワシントンポストに反戦の意見広告を掲載した。米軍のなかから、脱走する兵士が出てき

た。米軍のなかから、脱走する兵士が出てきた。ベ平連は、この脱走兵を援助し、スウェーデンへ逃がす運動を展開した。まさに日本「国民」ではない、国境を越えた存在として「市民」がいるのだ。現在の「市民運動」の萌芽がここにあった。

小田さんにとって私は、数多い学生ベ平連の一人にすぎなかったと思うが、阪神淡路大震災後、講演会をお願いしたり、イラク戦争反対のデモでは札幌でいっしょに歩いていただいた。以来、小田一家との交流がはじまり、2003年、ベトナムに同行した。ベトナム戦争で200万人のベトナム人が、6万人のアメリカ人が亡くなった。米軍が使用した枯葉剤などの生物化学兵器により、障害を持った子どもが今も生まれていた。ソンミ村では、家族が虐殺された悲しみにくれる女性に会った。戦争はどんなに歳月が流れても決して癒されることはない。一方、当時、アメリカとゲリラ戦を戦っていた、グエン・コン・タンさんに会った。日本の市民が、ベトナム戦争で破壊された戦車を修理して再びベトナムへ送りだすことに抗議して、米軍相模補給廠前で3か月にわたり座り込み、戦車を止めたことを彼は知っていた。延長300キロに及ぶ秘密のトンネルの中に隠れていた解放戦線の兵士たちは、NHK国際放送で、世界の市民

が立ち上がっていること、自分たちの抵抗は孤立していかないことを知った。トンネル内は沸き返った。その感動は、アメリカを敗走させる原動力になったにちがいない。国境を越えた「市民」の繋がりが勝利を後押しした。75年、南ベトナム首都サイゴンが陥落し、アメリカの大使館員が、われ先にと脱出する映像は世界に大きな衝撃を与えた。世界一の軍事力を持つアメリカが、南ベトナム民族解放戦線に勝利できなかった。これは今でも大きな教訓である。軍事力で心は縛れない、市民的不服従が圧政を跳ね返す、自分たちのことは自分たちで決める自治の論理、実にシンプルでしかしそこには民主主義の原点はありえないのだ。

デモで社会が変わるか。デモだけでは変わらないかもしれない、しかし、政治参加が選挙だけならば、社会が変わるはずもない。100万人のベルリン市民がドイツの東西の壁を壊し、韓国の100万人のキャンドルデ

モが文在寅大統領を誕生させた。日本では、やっと、人権や原発や環境問題が可視化されてきた。私も微力ながら、ここまでの40年50年、市議会議員をしたり、何百ものデモに参加してきた。この道のりには、報われない死や流された無数の涙や市民の汗があった。一方、政治の劣化は一層深まり、悪化している。沖縄の基地問題は自治の問題であり自己決定権が問われているにも関わらず政府は真逆の対応だ、自由や平和といった価値が脅かされている。「68年」の再評価が議論されているが、私たちの闘いは道半ばであることは認めつつ



ベ平連ニュース No.101(終刊号・第1面) 「ベトナムに平和を！」市民連合 1974. 3.1 立教大学共生社会研究センター蔵

もあの時代の志は今につながり、明日に連なっていると思う。小田実さんが亡くなって11年、生きていたらなんと言うだろうか、と自分に問うことが最近多い。私の心のなかに「殺すな！」は「ベ平連」は今も生きて

山口たか(やまぐちたか) 元札幌市議。市民自治を創る会代表。

内科・神経内科
**札幌中央
ファミリークリニック**
外来一般診療
月火木金9:00~12:00
札幌市中央区南1条西11丁目
ワンズ南一条ビル6F
TEL. 272-3455

Simple Life, High Thinking
小5から高3まで
スコアレユウ
NPO法人 森の学校ユウ
〒007-0866 札幌市東区伏古6条4丁目4-21
TEL. 785-0228
東区南一条 東区東区南8条2丁目13 TEL. 791-5770

特集

「革命的暴力」に代わるもの

——一九六八年以後五十年、未決の問い

秋元 由裕

ウォーラー・ステインによれば、一九六八年に起こったのは一八四八年革命に引き続く二度目の世界革命であった。しかし五十年を経た今日、原発や米軍基地、歴史修正主義をめぐる様々な政治的行動を目的にしたりして、日本には「革命」など起こらなかったのだとため息をつきたくなるのは、筆者ばかりではあるまい。これに対し、ファシズムの時代を経て同じ敗戦国として議会制民主主義を受け入れ、そして同じように学生叛乱を経験したドイツに目を向けると、そこではナチズムとの対決や環境保護、原発等々といったリアルな志向が、保守政権のもとでさえ広汎に共有されてきた。

歴史的な類似性にも関わらず一見して明らかかな日独のこうした差異について、その根拠を六八年以後における左派のあり方に求めるのは、自然な考えではあるだろう。すなわち、西独では「体制のなかから改革を実現しよう」という流れ」が一定の成功を収めた一方、「日本の場合、主に私生活への回帰、新左翼へ、

テロへという三つの流れ」しかなかったのだ、とする見解がひとつの典型である（西田慎『ドイツ・エコロジイ政党の誕生』）。しかしこのような捉え方がなお一面的だと思われるのは、それが六八年運動の（問い）を正面から受け止めていないからである。若者たちの叛乱は、日独いずれにおいても非生産的な相互敵対とテロリズムによって窒息してしまっただとしても、彼・彼女らの思想の根幹にあった戦後民主主義に対する切実な異議は、「制度内への長征」（ドゥチュケ）によっては決して救済されなかった問いなのである。今日必要なのは、この問いの意義をテロリズムの現実から切断する可能性を追求することであって、暴力に関与した思想と実践を単純に過誤として斥けることでは決してない。

一九六八年運動は、日独いずれにおいても、戦後民主主義をラディカルにのりこえようとした。だがその事情は、両国の間でいささか異なっている。西独の側では、その六八年運動は明確に世代間闘争の様相を帯びていた。

書によれば、安田講堂占拠に向けて意志一致を獲得する過程では、いわゆる「ポツダム自治会」の代表制Ⅱ多数決方式が壁として立ち塞がったという。たしかに「学生」という抽象性のみを根拠に、闘う者たちと闘わない者たちとを一堂に集めてしまえば、多数をなすのは当然後者であろう。しかし少数者は、少数であるというただそれだけで何故に多数者へと服さなければならぬのだろうか。闘争の渦中から湧き上がったこの原理的な問いは、キャンパスの枠を超えて、「戦後民主主義の人民支配機能そのものの本質にまで迫る認識」（東大全共闘編『若の上』にわたる世界を）へと拡大される。

この認識が、「公共」の名において公害に苦しめられ土地を奪われアイデンティティを傷つけられる少数者との連帯を要求したのであり、また少数者の声なき声を聴き取るうとする感受性が、戦後の「平和と繁栄」を加害の自覚において倫理的に捉え返すことを促したのである。戦後民主主義に対するこの省察こそ、日本の六八年運動が残した最高の社会思想だった。

その上でやはり、この六八年運動が「不可解な反乱の暴力」（ノルベルト・フラ

イ）を結果させたのは何故なのかという問題が再度浮上する。この問いに取り組むには、ラディカルリズムの暴力を（政治を根絶するための最後の政治」という論理において把握する必要がある。ここに云う（政治」とは、植谷雄高の記した意味で理解されたい。彼によれば、「これまでの政治の意志もまた最も単純で簡明な悪しき箴言として示すことができるのであって、その内容はこれまでの数千年のあいだつねに同じであった——やつは敵で



↑ 68年当時のドイツでのベトナム反戦ビラ。「ベトナム革命のための闘争は、抑圧と搾取から全人類を解放するための闘いである」と書かれている。

ニルンベルク裁判以後、東側に対抗するべく連邦共和国（BRD）の官僚組織を速やかに整備する必要に駆られた首相アデナウアーは、旧ナチ党のメンバーを数多く登用した。一九五〇年から五三年にかけて採用された局長レベルの内務官僚の内、六割以上が元ナチ党員だったとされる。また一九六六年に首相の座へ就いたキージンガーは、その本人がナチだった。民衆レベルでも、「アウシュヴィッツ裁判」に対しては当時五十四%の人々が裁判そのものに反対していた（この件については映画『顔のないヒトラーたち』を是非ご覧いただきたい）。かくして「過去に目を閉ざす」（ヴァイツゼッカー）社会の下で、戦前以来の権威主義的精神は何ら毀損させられることなく生き残った。しかし戦後世代が自らの反権威主義を政治的に表明するにしても、元来その声に応えるべき社会民主党は、キージンガー大連立内閣の一角を占めていたのである。ここに至って、ドイツにおける六八年運動は反議会主義の直接行動として結実した。

これに対して日本の六八年運動は、西独のそれよりも深い次元で戦後民主主義を問い直したように思われる。そこには代表制そのものの正統性に対する原理的な疑念と、そして倫理的な問いがあった。東大全共闘のある文

ある。敵を殺せ。いかなる指導者もそれ以上卓抜したことは言い得なかった」（政治のなかの死）。政治権力の本質的機能が暴力行使の独占であることは、レーニン、またヴェーバーによっても古くから指摘されてきた。そのような（政治）を人類史から除去しようとする高い理想が、しかしその目的達成のために、権力を打倒するために最後の一回限りで暴力行使を許容するという逆説——この革命的暴力は、一回性というその定義からして失敗を許されていない。しかし現実には失敗し、そして諸党派はこの論理を濫用した。だからこそそこには、あの限らない頹廢が生じたのである。

だとすると、（政治）を根絶するためには何が必要なのか、「革命的暴力」に代わる方向性は如何にして可能であるのか。この未決の問いに対して根本的に新しい仕方では得る思想こそが、次なる「世界革命」に向けた前哨をなすはずである。

秋元由裕（あきもとゆうすけ）

一九八四年札幌生まれ。博士（文学）、北海道大学外国語教育センター非常勤講師。主要論文「初期マルクスの本質概念」（日本哲学会編『哲学』第六九号）。

特集

大学における学生自治の行方

宮野晃一郎

今年になって、京大の「立て看板撤去問題」、「吉田寮在寮期限問題」が大々的に報じられています。私が北大に入学した頃は、民青や革マルの看板があちこちに立てられていたものですが、いまやほとんどなく、応援団のものを見かけるぐらいです。京大生はさすがだなと感服していました。また私が恵迪寮にいた頃、やはり「在寮期限」と「新寮獲得」の問題に関して、京大当局と長年にわたり粘り強く交渉を続けていた吉田寮生と交流があっただけに、これまでの確約をすべて破棄し、恫喝ともいえる態度で退寮を迫る京大当局のやり方には、自由な校風で知られるあの京大がそこまでやるようになったのかという驚きを禁じえません。学生自治をないがしろにしてきた、まるで北大のようです。

北大では全共闘運動以降、70年代、80年代を経て、95年の教養部廃止や副学長制導入といった独立法人化に向けた制度改革が進められていくとともに、学生生活への管理が強化されていきました。たとえば、95年の初夏の早朝、北大演劇研究会（演研）の青アクトに当局の「屈強な事務」が押し寄せてきて強制

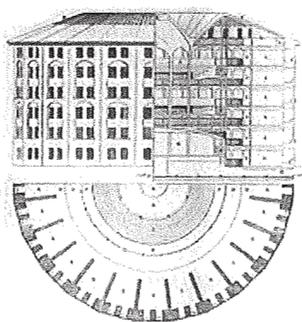
撤去しようとするという出来事がありました。私たちはピケを張ってなんとか阻止しました。当局は、暴動に発展した場合、機動隊を導入する準備をしていたようでした。結局その後、当局に利用申請を出して、整備されたばかりの「体育館前ステージ」にテントを立てざるをえなくなりました。この出来事は前史があります。「サークル会館闘争」です。70年代、北大構内には複数のサークル会館があり、文化系サークル団体（文連）の学生たちが、24時間自主管理をしていました。北大当局は、学生の抵抗運動を機動隊の圧力で封じ、重機ですべての施設を取り壊し、80年「新サークル会館」を建設します。この施設を利用するためには、当局の公認を受けなければなりません。当局の公認による管理を拒否し、北大構内での自由な活動を志向した演研は、教養部の建物の横にビニールシートで大きなテントを立てて芝居を毎年のように続けていました。芝居を打つたびに、当局による撤去要求と、演研による抵抗活動が繰り返されました。こうした一連の流れの先に、私たちの「95年」があったのです。大学って

もっと自由な場だと思っていたのに、北大の学生が、北大の構内で、自由に活動することができない。そういうことを思い知った象徴的な出来事でした。

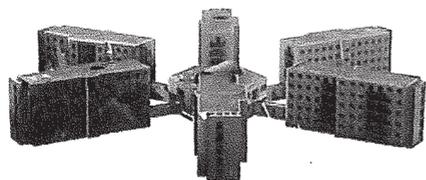
恵迪寮の運動はどっだったのでしょうか。私が入寮した94年の秋に女子入寮が行なわれ、男子寮から男女混合寮になりました。95年には寮内のコンパで飲酒死亡事故を起こし、寮自治会は存亡の危機ともいえるような事態に直面しました。私が寮生活を送っていた時期というのは、北大の制度改革と同様に、寮自治の変革期であり過渡期であったと思います。私の入寮前から寮運動の中心となっていたのは、「自主入寮銓衡闘争」でした。70年代後半、老朽化した寮の建て替え問題が持ち上がります。当時の文部省は、「69年」の大学紛争をふまえ、寮を学生運動の温床と見なし、75年に各国立大学に新しい寮を建てるための条件、「新々寮規四条件」を通過します。①入寮選考の当局掌握、②完全個室制、③食堂の廃止、④光熱費の負担区分導入の四条件です。これらは、寮生の求める自主管理の権利を奪い、共同生活を破壊し、個々の寮生を当局の管理下に直接置こうというものです。寮生は寮連を組織して抵抗しましたが、83年に札幌地区に7つあった学寮が統合され、新々寮「札幌地区男子学生寮」（現在の恵迪寮）

が建設されます。新々寮規を受け入れず旧寮の生活形態と権利を保持しようとする恵迪寮自治会に対して、北大当局は入寮募集停止処分を下します。寮自治会は反発し、自分たちの生活の場を守るため、また、学寮の厚生の施設としての意義を果たすため、84年自主入寮銓衡を敢行します。以降、入寮銓衡権の獲得が寮運動の支柱となっていきました。そして、数度の自主入寮銓衡を実行していくなかで、寮事務室に常駐していた当局事務員を排除したり、廊下に畳を敷き詰めて居住スペースにしたりしながら、独自の共同生活や自治寮としてのかたちを作り上げていったのです。当局が公式に寮名を「恵迪寮」と認めたのは89年「恵迪寮自治会」を認めたのは97年のことでした。しかし、「四条件」が完全に撤廃されたわけではないことは、言うまでもありません。

でも、「寮運動」にしても、共通しているのは、北大の一員として、北大で自由に活動するための運動であり、多様な学生が多様な活動を行える「場」の構築こそが目標であったということだと思います。96年の北大祭で当時の副学長との討論会が催されたことがありました。学生も北大の構成員なのだから、北大の意思決定に参加させてほしい、せめて評議会にオブザーバー参加でもできないのかと問うと、学生は4年と短期間で大学を去るのだから、意思決定の構成員としては認められないというような回答でした。自分たちで自分たちのことを決められない、自分たち抜きで自分たちのことが決められていくのが北大なのだと思います。2000年以降の北大祭オールナイト開催禁止、飲酒禁止など、学生の管理を押し進めていく当局の姿勢は、加速度的に強まっているように感じます。「68年」から私たちの時代を経て、現在の大学における学生自治の縮小、抵抗運動の減少は、全国的な傾向であることは否めませんし、これは現在の市民運



恵迪寮(左)とミッシェル・フーコーが『監獄の誕生』で描いたパノプティコン(右)



動にもあてはまるかもしれません。セクトや党派を敬遠し、組織の力で社会変革を目指したわけではない運動は、結果的に連帯や支援の弱体化を招き、運動そのものの消滅の危機を迎えているように感じられます。今回の連続講座では、「68年」を知らない世代と当事者の世代との対話や交流のきっかけとなるような話をしてほしいとのご依頼でした。学生自治の場が、少ないながら北大の片隅にありえたのは、当時の北大生のなかに、「68年」の微かな熾き火が残っていたからなのだろうと思います。そしてこの熾き火は、消えかきながらも、今の学生たちのなかに確かな輝きをもって燃えています。民主的に物事を決めていくとはどういうことか、自分の生活の主体となるとはどういうことか、こうしたことを考え実践する体験は、世代を越えて共有されてゆくものです。熾き火に風を送り、新たに広く燃え上がらせていくような対話を、私たちは心がけていかなければならないのだと思います。

宮野晃一郎(みやの こういちろう)
一九七四年札幌生まれ、千葉育ち。一九九四年北海道大学入学と同時に恵迪寮入寮。現在、おもに札幌圏のあちこちで非常勤講師、哲学や倫理学を担当。

特集

ベ平連から今日までの市民運動を振り返る

花崎 皋平

『個人』と『市民』という自覚

「ベトナムに平和を市民連合」(ベ平連)が活発に運動していた時期は、一九六五年から一九七二〜三年頃ですから、今から五〇年も前で、今の若い人にははるか昔のことです。昔を懐かしむのは年をとった者の暇つぶし。今日から出発して何が学べるかという視点で考えるべきだと思います。

私としては、「市民」という意識と「個人」という自覚は、ベ平連運動で否応なく目覚めさせられました。それまでは、階級とかプロレタリアートがキーワードでした。それから五〇年、日本社会と日本人のなかに、その自覚はじわじわと浸透してきています。人権意識の伸長はその例です。しかし、あまり伸びていないのは、「アジア人」であるという意識です。アジアの人々との民衆レベルでの連帯の運動はこの当時より少なくなっています。

アジア人であることの自覚

アメリカのベトナム侵略戦争反対で強く感じさせられたことは、私たち日本人がベトナム

連帯、朝鮮半島の非核化という情勢の発展に、日本の市民勢力が連帯し、アメリカべつたりで韓朝平和の発展を妨害している日本の右翼勢力を退潮させる活動を進めてほしいです。ベ平連がベトナムに平和を！と唱えたように朝鮮半島に平和を！朝鮮半島を朝鮮民族の平和で自由な発展の地に！という声をあげ、韓国の「参与連帯」、ソウルのキャンドル運動などの市民活動家を招いて交流する活動を、北海道の平和運動全体に働きかけて実現してほしい。それが、私の、今一番に要望したいことです。

花崎 皋平 (はなざき こうへい)
著述業。『天と地と人と一民衆思想の実践と思索の往還から』ほか著書多数。

東ティモール マウベシ珈琲

オーガニックカフェやショップで販売中
フェアトレードの美味しいコーヒー!!

NPO 法人 ほっかいどうピーストレード
TEL 070-5619-3222
hokkaidopeacetrade@gmail.com



自然食ホロ

札幌市東区中沼西
5条2丁目3-16
TEL: 887-6224

いつも喜んで、
感謝して。

<http://holo.sunnyday.jp/>

1968年から50年 — その「問いかけ」を今に <後編>

第1回 11月16日(金)

大学の現場から—「軍産官学共同体」か「市民目線の大学」か?

●山形 定 (やまがた さだむ) 北海道大学工学研究院教員

第2回 12月21日(金)

地域の暮らしを破壊する「開発」—伊達火力発電所反対運動から

●花崎 皋平 (はなざき こうへい) 著述業/大嶋 薫 (おおしま かおる) 札幌市議会議員

第3回 1月18日(金)

先住民族の自立と解放—アイヌ解放運動の胎動

●竹内 渉 (たけうち わたる) 前(公社)北海道アイヌ協会常務理事・事務局長

第4回 2月15日(金)

主体としての「女」—リブが問いかけたこと

●ひがし ゆかこ 泡沫だけどエコな雑貨店で奮闘中

第5回 3月15日(金)

まとめのディスカッション 68年の「問い」と現在、そして未来

- 全5回 月1回金曜 18:45 ~ 20:45
- 会 場 さっぽろ自由学校「遊」(愛生館ビル5F 501A)
- 受講料 一般5,000円 会員4,000円 25歳以下2,000円
(単発 一般1,500円 会員1,000円 25歳以下500円)

ム人との、ひいてはアジアの人々との友人、仲間として生きるかどうかということでした。そのことへの自覚めは、次の時期にフィリピンのマルコス独裁政権と闘う人々との連帯運動、東南アジア各地への公害輸出を許すなという自主講座運動、日本国内での水俣病患者運動や成田空港建設に反対する農民への支援連帯運動につながりました。

アイヌ民族の運動との連帯

北海道では、伊達火力建設運動でのアイヌ漁師たちの活動は、アイヌ民族のアイデンティティの自覚をうながし、私たちにもアイヌ民族との連帯の活動をうながし、一九八九年の世界先住民族会議につながって行きました。

さっぽろ自由学校「遊」の創立

世界先住民族会議の運営事務局を担った有志が、この世界会議を担った経験と成果を—過性のものにしたいため、一九九〇年に立ち上げたのが、『さっぽろ自由学校「遊」』です。さっぽろ自由学校「遊」はそれから今日まで

持続し、発展してきました。

現在、自由学校は全国に数箇所あり、八王子のように別名だが同じ趣旨のものもあります。この活動は、市民が自ら運営し、自分たちが学びたいことを学ぶ自主自立の組織であり、私たちにとって大事な財産です。

札幌の場合、専従事務局と運営理事会があり、年間を通して人権、政治、社会、語学、その他技能や地域発展、文化など極めて多様な講座を開いています。設立当初からアイヌ史、アイヌ文化の講座を開かなかつた年はなく、これは北海道のどこにもない誇るべき特徴です。

北海道の行政などへの働きかけ

最近では札幌市や北海道の行政に対して、市民の自由な活動を励まし、促進するよう協議し、要求する活動にも積極的になっています。また、国連が提唱している「持続可能な発展のための教育活動」にも力を入れていきます。

これからの市民運動への要望

これからの活動としてはアジアの民衆運動との連帯を発展させて欲しい。まずは今、意気高い韓国の民主化運動との連帯を希望します。韓国と朝鮮民主主義人民共和国との平和

稿

寄

北海道命名一五〇年と開道一〇〇年

戸塚美波子

今年二〇一八年は、北海道命名一五〇年と。五〇年前の一九六八年は開道一〇〇年。一〇〇年記念塔が建てられ、まさに「祭り」でした。当時二〇歳の私は両親ともにアイヌ。釧路の町で「あつ、いぬがきた」と指さされ、小中学校では「あいぬ」と言われ、人種差別を受けながら育った私は、開道一〇〇年の行事に悔しく悲しい思いでいっぱいでした。

エゾを北海道と名付けた松浦武四郎が、北海道中で取り上げられています。その内容に、私はアイヌとして不信に思います。武四郎は、ただ単にエゾ地を歩いたわけではなく、行く先々で目にし、耳にした和人による、アイヌへのひどい仕打ち。その結果、失われたたくさんアイヌの命を書き記しているのです。

それと、近年、アイヌの文化がもてはやされていますが、アイヌは文化民族なのでしょうか？ アイヌを名乗るひと、アイヌを名乗れないひと、アイヌでないひとたちに、アイヌの真の歴史を考えて欲しいと思います。

この文章の筆者は、クッチャロ（屈斜路）湖畔に住む戸塚美波子さんです。この文章の中に触れられているように、一九六八年「開道百年」が大掛かりに祝われていることに対して、二〇歳の彼女が声をあげました。そのときの北海道新聞への投書は、開道百年がアイヌの人たちを全く視野に入れていないことを知らしめ、アイヌ民族の目覚めを促す役割を果たしました。

今年、北海道命名一五〇年が祝われようとしているときに当たって、再び北海道新聞に投書したのがこの文章です。残念ながらこの投書は没にされて掲載されませんでした。北海道新聞には現代のアイヌ史を知る人がいないのだなど残念な思いです。戸塚さんに「さっぽろ自由学校『遊』の通信「ゆうひろば」に掲載させていただきます」とお願いしました。

(花崎卓平)

【参考】50年前の戸塚美波子さんの投書
ことしは北海道百年祭が道民の大きな関心事となつていますが、私はこの行事になかなか興味を持っていません。なぜなら私はアイヌ人だからです。私たちの祖先は明治以前からいろいろな形で圧迫を受けてきました。そしてこの進歩した今の世の中でさえアイヌの若い男や女が結婚しようとするとなにかと障害となるケースは珍しくありません。また同じこの北海道に住み、いっしょに暮らしているながら、いまなおアイヌ人を低く見る人のいることも事実です。

むろんきびしい自然条件の北海道に渡り、多くの困難を乗り越えて今日の北海道の繁栄の基礎を築いた人たちの努力には敬意を表わします。また北海道百年を機会に先人の労苦をしのぶことはけっこうなことと思います。しかし、北海道百年を記念して建設する百年塔のその土台の下の北海道の土には、われわれアイヌ人の流した悲しい血がしみわたっていることも忘れないでほしいのです。

(釧路市・戸塚美波子 20歳・店員)

第七五回 スコットランドのコミュニティ再生可能エネルギー

英国スコットランドの北部に、ディングウォールという小さな町がある。リチャード・ロケットさんの二〇〇ヘクタールのわたる農場は、その町はずれの丘に広がっている。そこに一本の風車が立っている。

リチャードさんが風車を建てたのは二〇一四年。スコットランド最初のコミュニティ再生可能エネルギーと言われている。個人が建てる風力発電はそれまでもあったが、コミュニティで出資しあって建てられたものとしてはスコットランドで初めてだった。

大学で環境科学を学び、現在農場経営を行っているが、環境コンサルタントとしても仕事をしているリチャードさんが自分の農場に風車を建てようと考えたのはもうだいぶ前だった。しかし、コミュニティ再生可能エネルギーのコンサルティング団体「シェアエナジー」と出会い、そこで協同組合形式で資金集めをするアイデアを知ってからはとんとん拍子に事業が進んだ。出資者（組合員）を募るため、地域で説明会を開き、新聞広告を打ち、個人宅へのポスティング



も行った。その結果、出資は順調に集まった。出資者の四分の三は四〇キロ圏内の住民たちだった。「出資者のほとんどは、投資目的と同時に、環境への関心などが動機になっていると思います。」

この協同組合のもうひとつの特徴は、利益の一部をコミュニティ・ファンドとして地域に還元するしくみをもっていることだ。組合総会で決めたテーマにしたがって助成対象を募集するが、これまで、フットパスを整備する団体、地域森林プロジェクト、子供の運動場などに助成している。地域で集めたお金で事業を行い、その利益を地域に還元する形だ。

スコットランド政府は、こうしたコミュニティ再生可能エネルギーを積極的な後押しする政策をとっている。資金援助政策をスキームとして持つていて、初期資金の無償援助もあれば、事業への無担保ローンやつなぎ融資のしくみももっている。多くのコミュニティ再生可能エネルギーがこれを利用して

スコットランド政府のこうした姿勢は、単にエネルギー政策というより、むしろコミュニティ再生に力点がある。スコットランド政府は、一九九〇年代後半以降、政府の土地や大土地所有

で放っておかれている土地をコミュニティへ戻すという施策を始めており、そうしたコミュニティ再生政策の一環として、コミュニティ再生可能エネルギー促進もある。

しかし一方、英国政府の側は、これまで再生可能エネルギーを後押ししてきたFIT（固定価格買取制度）の価格を大幅に下げたこと、二〇一九年三月でFITの新規受付を終了させる予定だ。このあたりも英国政府とスコットランド政府の方向性のズレは大きい。せつかく花開き始めたスコットランドのコミュニティ再生可能エネルギーは、どうなるのだろうか。

ところで、リチャードさんのこのコミュニティ風力発電は、地域に別の効果ももたらした。コミュニティ風力の主要メンバーの一人が、今度、コミュニティ発のウィスキー製造所を始めたのだ。風力発電のときの協同組合形式に似た形で地域内外から資金を集め、しかも組織をNP0として立ち上げた。製造に使うエネルギーはもちろん再生可能エネルギー。九〇年間絶えていたディングウォールでのウィスキー製造再開でもあった。

宮内泰介（みやうちたいすけ）

一九六一年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで、環境、生活の調査中。



ボロボロ日記

東 龍夫

第99回

天災と文明

「天災は忘れたころにやって来る」という有名な言葉を残した寺田寅彦。1923年の関東大震災を調査した物理学者で地震学者です。彼はまた、「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する」という言葉も残しました。北海道で震度7、札幌市で震度6をいずれも初めて記録した9月6日の胆振東部地震。その余震が今なお続く中で、寺田が生きた頃より「数段進んだ便利さに囲まれた現代文明」は、どうなるのでしょうか？

それを考えるきっかけになったのは、やはり「ブラックアウト」ですね。電気が止まって、一番困ったのは何でしたか？生活している環境で様々だと思います。わたしは、ちよつと不便でしたが、懐中電灯や携帯ラジオ（ラジオは車でも聞けたし）は用意していた

し、携帯電話は「繋がらないのなら仕方ない。元々20年前にはなくても暮らしていたのだから」と「達観」していました。でも、ひとつだけ、「この地震が7年前に起きていたら生命の危機に向き合ってたろう」と思っていました。その頃わたしは、自宅で母の介護をしていました。自力で食べることの出来なかつた母は、飲み込みが出来ないので、痰の吸引は必須。吸引機は電気で作動します。停電は正に生命の危機に直結します。地震以後の新聞記事にも、自宅で暮らす人工呼吸器を使っている人などを、緊急に救助したことなどの記事が掲載されていました。

実はわたし、今から40年ほど前に、電気のない生活をしたことがあります。何故そんなことになったのか？そのころ、北海道では伊達火力発電所（今回の「ブラックアウト」の解消に重要な役割を果たしたのは歴史の皮肉ですね）の建設が大きな問題になっていました。排煙や温排水が、自然環境や農業・漁業に甚大な被害を与えることが懸念されていたのです。建設差し止めを求めて裁判も起こされていました。そうして一連の建設反対運動の中で、北海道電力への抗議の意思表示として、電気料金の不払い運動が起きました。わたしもそれに賛同し抗議の不払いをした結果、電気が止まりました。それも1カ月！そのころわたしは、5才の娘と1才の息子の

子育て中でした（何と無謀な親でしょう）。一番困ったのは、オムツの洗濯（まだ紙おむつは一般的でなく布オムツだった）。手洗したり、友人のところまで洗濯槽を借りたりしてのぎました。今でも覚えているのは、電灯のない夜、子どもたちと布団の中で寄り添い、懐中電灯を頼りに絵本を読んだことです。電気がないと命にかかわることもあります。電気は必要です。しかし一方で、なくても生きていける「生活力」を身につけることも必要です。これには、キャンプや登山などのアウトドアの経験が役に立つので、孫たちも連れ出して「生活力」を身につけることが防災にもつながります。

わたしたちの生活はいつの間にか、電気を「利用する生活」から電気に「依存する生活」になってしまいました。これまでは、なんでも電気でやれるようにすることが当たり前でした。これからは、電気でしかやれないことと電気がなくてもやれることを区別して、少し不便でも敢えて電気を選択しないことが、次の「天災（自然）」と共に生きる文明」につながるかも知れません。

東龍夫（ひがしたつお）

一九五二年生まれ。再生資源回収業。大量消費社会から持続可能な循環型社会を目指して活動中。札幌市環境保全アドバイザー、北海道環境学習トレーナーを務める。

企画報告

北海道のSDGs推進ビジョンへの提案に向け、グループ別ワークショップを開催

2030年までの世界共通目標として国連が採択したSDGs（持続可能な開発目標）。「遊」では、このSDGsが採択された2015年以降、市民の視点からSDGsを北海道という地域に即して考えていく取組みを進めてきました。自治体としては、下川町や札幌市が比較的早い段階からSDGsを意識した動きを進めていましたが、今年4月には北海道が「北海道SDGs推進本部」を設置し、北海道SDGs推進ビジョン（仮称）の策定に向けた取組みをスタートさせました。このビジョンの策定にあたっては、7月からSDGs推進懇談会という意見交換のための会議が招集され、「遊」でSDGsへの取組みを進めていた私もそのメンバーとなりました。

道が策定しようとしているこのビジョンは、骨子案の段階から「道内の多様なステークホルダーが互いに共有する基本的な指針」として位置づけられていました。しかし、策定スケジュールは、2か月後の9月には原案を策定し、11月には最終案を確定するという非常にタイトなものであり、その間に3回ほどの懇談会が想定されていたものの多様なス

テークホルダーからの意見を反映させようという意図は感じられませんでした。また、骨子案段階から、道の総合計画に沿った形の構成案ができており、ビジョンと言いながらSDGsの前提となっている将来のあるべき姿からバックキャストイングで現在のあり方をみつめ直すつくりになっているとは思えませんでした。

国連では、92年のリオ地球サミット以降、「持続可能な開発」を進める上で重要な役割をもつグループとして、9つのメジャーグループ（女性、子ども・若者、先住民、NGO、地方自治体、労働者・労働組合、産業界、科学・技術コミュニティ、農民）が設定されており、SDGsにおいてもこのメジャーグループおよびその他のステークホルダーが策定や評価のプロセスに参画しています。私は地域におけるビジョンの策定プロセスにおいて、こうした多様なグループの参画が必要と考え、第1回の懇談会（7月23日）の終了後には、SDGs市民社会ネットワークの黒田かをりさんを講師に国連のオープン・プロセスについて学ぶ学習会を開催するとともに、懇談会のメンバーにグループ別

ワークショップの開催を呼びかけました。懇談会には以前から行動を共にしていた人たちも多く、限られた準備期間ながらも複数のメンバーが趣旨に賛同し、9月下旬から10月上旬にかけて、「女性」「アイヌ民族」「若者」「CSO（市民社会組織）」という4つのグループと、「経済」という1つのテーマで、2030年の北海道のあるべき姿（ビジョン）を考えるワークショップを実施することができました。各々のワークショップで出された意見は、10月22日に開催された第3回目の懇談会を通して道に提出しました。

懇談会では活発に意見や提案が出されており、傍聴者からは「面白い」と言われていますが、残念ながら懇談会の意見は今のところほとんどビジョン案には反映されておらず、行政機構（道庁）の分厚い壁に啞然とさせられています。ですが、「誰ひとり取り残さない」という基本理念を掲げる国連のSDGsを取り上げる以上、その実質に迫るような動きになるよう、今後も働きかけを継続したいと思います。（小泉雅弘／「遊」事務局長）

※道のビジョン原案や、懇談会の議事録、提出意見などは以下の道のウェブサイトにアップされています。（北海道「SDGs」で検索）
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sks/SDGs/top.htm>



そのままに俳句

第17回

世界最短の定型詩と言われる俳句。五・七・五で作られる世界。日常、見たり聞いたり感じたりしたことを、忙しい日々で忘れてしまふその一瞬を、十七文字に込めてみました。

無人駅ホームを照らす秋の夕

かつては電車が走り、おそらくそこに住む人々が利用していたであろう駅。数年前の土砂崩れの後、線路の復旧も進まないまま、使われなくなりました。かつてここで撮影された写真を見て、この駅を訪れてみた。小さな駅舎はまだ残っていた。農家が点在するのどかな景色に心が落ち着く。ホームに出てみると、線路はまっすぐに伸びていて、駅名の看板はきれいなまま。ちょうど夕暮れ時。線路の向こうに夕日が沈みそう。賑わっていた時代のこの駅を私は知らない。でも柔らかな秋の日差しに照らされるこの小さな駅は周辺の緑にとっても映えて、しっかりと存在していることが感じられた。また訪れたいと思う場所のひとつになった。



柚原誓子(ゆはらせいこ)
平日は会社員。休日は心惹かれるままに、趣味のスキー、温泉、旅行を楽しんでいます。数年前から始めた俳句。あらためて日本語の美しさに触れています。

本を手に眠りに陥る夜長かな

普段はなかなかゆっくりと読書をするのがない生活。どちらかというと動いている方が好きだから。でも秋の夜長。読書の秋ということ、本を読もうと試みる。布団に入って寝転がって読もうとする。でも暖かい布団は眠りを誘う。やっぱり予想した通り、本を開いたまま、メガネをかけたまま、そのまま夢の中へ。せっかくの夜長も、読書の秋にはできなかった今年の秋。来年はきつと！

事務局だより



最初は、小学二年の時。教室のダルマストーブの周りに何人もが座って温まっていた時のこと。ストーブの上には蒸発皿と呼んでいた鍋が乗っていた。突然、担任のサナダチヨコ先生が、僕らを次々とストーブから引き離れた。首根っこを掴まれてだったか抱きかかえられてだったか、それははっきりしない。揺れの記憶もなく、どうしてそんな目にあったのか、その時は分からずにいた。地震だったことを知ったのはいつだったか。でも何時からか僕の地震の記憶としてある。調べるとこれは三月四日十時三十分というから、休み時間だったのかもしれない。一九五七年の「十勝沖地震」のこと。

次は、教員になって二年目。五人の子たちと体育館にいた時、床が波打ち始め、僕は固まって床に座り込んだ。揺れが収まって「地震かあ」と喋りあってそれだけで終わったのだが、記憶に残ったのは床が波打つのを初めて見たからに違いない。一九六八年五月一六日のやはり「十勝沖地震」。函館大学の一階が潰れてしまったのを新聞を見て知った。

三つ目が、この九月六日午前三時八分の「胆振東部地震」と名付けられることになった地震。その前日五日のほぼ同じ時刻に風の音で目覚めたが、この日もガリガリという音で目が覚め、それから縦か横か区別できない揺れに「地震だ！」。それから四〇時間余り電気・水・ガスが使えない時を過ごす。そして、携帯ラジオの音しかかない中で、僕の「地震」の体験と記憶を思い出したり作ったりしながら、これとは別に記憶し続けなければならない「地震」のことを考えてた。

(黒田秀之)



編集後記 札幌市議会で、フェアトレードの支持・普及に関する決議が採択されたというニュースが飛び込んできました。北海道発のフェアトレード団体、ほっかいどうピーストレードの扱うマウベシ珈琲は味もよいです。「遊」でも秘かに(?)扱っています。(こ)

オーガニック・自然食品専門店

有機やさいと加工品! 配達もやっています!

らる火田

札幌市中央区大通西23丁目
tel 614-2406 Fax 614-3836
http://rarubatake.com
AM10時~PM7時(日曜PM5時)

生活クラブは、ちよっと変わった生協です! モットーは「おいしくてカラダによくて 自然を壊さない」です

生活クラブ北海道 検索

北海道平和運動フォーラム

代表 江本 秀春
代表 清末 愛砂
代表 長田 秀樹

札幌市中央区北4条西12丁目
TEL.011-231-4157
FAX.011-261-2759
http://peace-forum.org/

いつだって No Nuke!

北海道のエネルギーの未来を考える
10,000人の会



さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

11月～12月の講座よりピックアップ（＊は単発参加費）

- <世界の先住民政策研究は何を目指しているのか>** ＊一般 800、会員・アイヌ民族・25歳以下 500
 ●講師 丸山 博（スウェーデン・ウプサラ大学名誉博士）
 11/7（水）18:45～ サミー文化と北部スカンジナビアの自然との不可分の関係を芸術で表現する
 12/5（水）18:45～ 高等教育におけるグリーンランド語への支援
- <アメリカ文化と音楽>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 ●講師 くらだ としひこ（NPO 小さなカレッジ代表）
 11/9（金）18:45～ 西部開拓と南北戦争時代の音楽 12/7（金）18:45～ 奴隷解放と南部音楽の始まり
- <多様な生き方と技術の民主化>** ＊一般 2,000、会員 1,800、25歳以下 1,000
 ●講師 俵屋 年彦（ソーシャルパワー SAPPORO）
 11/10（土）14:30～ 仮想通貨・ブロックチェーン 12/8（土）14:30～ センサー社会・ドローン
- <地域をつくる>** ＊一般・会員 1,000、25歳以下 500
 11/14（水）18:45～ 高齢者の集う場を切り口にした地域づくり ●北村久美子（ワーカーズコープ札幌）
 12/12（水）18:45～ 食を通して地域とつながる ●池田菜穂子・中神治夫（「おうちごはん野の」経営）
- <1968年から50年—その「問いかげ」を今に（後編）>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 11/16（金）18:45～ 大学の現場から ●山形 定（北海道大学工学研究員教員）
 12/21（金）18:45～ 地域の暮らしを破壊する「開発」 ●花崎阜平（著述業）、大嶋薫（札幌市議会議員）
- <人権から見た 在日コリアン戦後70年史>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 ●講師 林 炳澤（さっぽろ自由学校「遊」共同代表）
 11/19（月）18:45～ 植民地支配の終焉
 12/17（月）18:45～ 日・韓の国交回復
- <続々 このままでいいの？ 再生可能エネルギーの進め方>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 11/20（火）18:45～ 地熱発電は有効か—その問題点 ●在田 一則（一般社団法人北海道自然保護協会会長）
 12/18（火）18:45～ 秋田県由利本荘市における風車騒音による健康影響の「科学的な」評価と予測
 ●田鎖 順太（北大大学院工学研究院助教）
- <行政文化の改革は可能か>** ＊1,000、25歳以下 500 ●講師 森 啓（北海学園大学法科大学院講師）
 11/21（水）18:45～ 公務員の考え方は如何にして変わるか
 12/19（水）18:45～ 文化行政
- <記者たちの白熱教室—ジャーナリストを目指す君へ（後編）>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 11/29（木）18:45～ Be Trans-Border Press! 新聞記者は「境」を越える ●喜多 義憲（元北海道新聞記者）
 12/6（木）18:45～ 地域の課題を掘る—北方領土から生活保護まで ●本田 良一（北海道新聞編集委員）
 12/27（木）18:45～ 「自称記者」の一人言—記者クラブの外から書く ●小笠原 淳（フリー）
- <企業と人権—SDGs時代のビジネスに求められるもの>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 11/30（金）18:45～ ディーセント・ワークと日本の労働者 ●川村 雅則（北海学園大学教授）
 12/16（日）13:30～ 「ビジネスと人権」とSDGs ●松岡 秀紀（ヒューライツ大阪特任研究員）
- <優生裁判から見えるもの—優生思想、いのち、人権>** ＊一般 1,500、会員 1,000、25歳以下 500
 12/14（金）18:45～ 優生保護法と障害者 ●山崎 恵（DPI北海道ブロック会議 事務局長）

ゆうひろば

発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目 愛生館ビル5F 501

・郵便振替口座： 02780-5-47036（名義：自由学校「遊」）



- ・TEL:011-252-6752
- ・FAX:011-252-6751
- ・syu@sapporoyu.org
- ・http://www.sapporoyu.org

※他にも参加可能な講座あります。詳しくはカレンダーを参照ください。

二次元コード読取機能付の携帯電話でこのコードを読み取ると、カレンダー情報のページにアクセスできます。携帯電話用のURLを直接入力しても同様です。
<http://sapporoyu.org/m/>

